

否定によって付加される価値

—ケネディー大統領就任演説の分析—

柳 沢 浩 哉

従って、国家が諸君のために何をなしうるかではなく、諸君が国家のために何をなしうるかを問い給え。

(And so, my fellow Americans, ask not what your country can do for you; ask what you can do for your country.)

これはケネディー大統領就任演説の中の有名な一文である。筆者は以前、この一文が説得力をつくりだすメカニズムを分析したことがある（柳沢（1991））。しかし、否定の説得効果という点を考慮しなかった拙稿での分析は不十分なものであり、今回、再びこの一文の分析を試みることにした。本稿では説明上、上の一文を（1）と呼ぶことにしたい。本稿では、否定の持つ特殊な説得効果の一つを明らかにし、その説得効果を軸に、（1）の説得力のメカニズムを検証する。

ケネディー大統領就任演説の最終部に登場する（1）は「名文家として知られたケネディー」（松尾（1987）p.38）の中でもおそらく最も有名な言葉であり、アーリントン墓地にある彼の墓碑銘の中央に刻まれている。現在でも読む者にある種の感動を与える名文であるが、その説得力は巧みに計算されたレトリックによって作り出されている。

（1）を見てすぐに気づくことは、これが反復形式を取っていることである。反復形式はレトリックで精緻に細分化されている文彩（figure）の一つであり、同じ語を異なる語順で繰り返している（1）の形式は、反復の中でも特に倒置反復（antimetabole）と呼ばれている。（1）の説得力を支えているのは言うまでもなく、この倒置反復である。アメリカの修辞学者エドワード・コーベットは倒置反復の説明の中で（1）にふれ、次のように述べている（Corbett and Conner（1999）p.394）。

（倒置反復は）最も覚えやすいアフォリズムに登場する語法である。ケネディー大統領就任演説の文がもしも次のようであったなら、これほ

どしばしば引用されたであろうか？『アメリカが諸君に対して何をなしているかは問わないでいただきたい。国家が諸君の貢献を必要としているかを問うべきでありましょう。』(Do not ask what America can do for you. You would better to ask whether your country stands in need of your services.)
こうすると、訴えから「魔法」は消え去ってしまう。

文語的な響きを持つ冒頭の Ask not を Do not ask と換えている点や、後ろの節をかなり冗長な文に作り替えている点など、少なからず作意性を指摘できる言い換えではあるが、この指摘どおり倒置反復が(1)に説得力を与えていることは間違いあるまい。確かに倒置反復は表現に格調の高さや深みなどを与える技法であるが、倒置反復の全てが、これほどの説得力をつくりだせるわけではない。コーベットの収集している倒置反復の例のいくつかを挙げてみる。

- (2) 人類は戦争を終わらせなくてはならない。さもなければ、戦争が人類を終わらせるであろう。(ケネディーの演説、1961年)
- (3) 黒人は白人に対し恐怖からの解放を要求し、白人は黒人に対し罪からの解放を要求する。(マーチン・ルーサー・キングの演説、1966年)
- (4) 私はこの男をずっと、知性に囲まれた貴族であると思っていたが、彼は貴族の中でただ一つの知性であることが分かった。(サムエル・ジョンソン)
- (5) あなたはそれが好き。それはあなたが好き。(セブン・アップのキャッチコピー)

翻訳の稚拙さという問題もあろうが、(2)～(5)の倒置反復に(1)ほどの強力な説得力は感じられない。(1)の説得力にとって倒置反復は確かに不可欠であるが、倒置反復だけで(1)の説得力のメカニズムを説明することはできないのである。

(1)の説得力は形式面よりも、その趣旨に求めるべきであるという指摘がある。スピーチ研究者の松尾弑之氏は(1)について次のように述べている。(松尾(1987) p.39)

しかし、このくだりが有名になったのはそうしたレトリックの技術がすぐれていたからではない。レトリックのはなばなしさに負けないだけの内包された意味があったからだということは、忘れてはならないことである。

確かに（１）の魅力には内容面がより多く関与しているようにも見える。説明のために、（１）の前半部の問いと後半部の問いをそれぞれ次のようにA、Bとしてみる。

A 国家が諸君のために何をなしうるか

B 諸君が国家のために何をなしうるか

Aで問題とされているのは、国民生活に対する国家の保護である。国民生活の保護は国家の機能の一つであるから、国家に対してAのように問うこと、あるは期待することは一般に受入れられる。一方、Bはどうであろうか。Bが問題としているのは、国家に対する貢献の要請である。国家は国民に対し貢献を要請する性質を持つものであるから、国家が国民に対して貢献を要請すること、あるいは何らかの貢献を期待をすることも一般に受入れられる。これはBの「国家」をたとえば「政府」に言い換えて比較することではっきりする。

（B 1）諸君が政府のために何をなしうるか

（B 1）の許容度はきわめて低い。もしも許容される場合があるとすれば、この問いが国家公務員に向けて発せられた場合だけであろう。「政府」は「国家」と違い、国民に貢献を要請する性質を持たないからである。少々居丈高な言い方になっていることもあってAの場合ほど自明ではないが、BもAと同様、常識的な、すなわち通念に沿った問いなのである。印象的な（１）であるが、内容的には通念を問いの形式で述べているに過ぎず、否定された部分を省略して（１）の趣旨をまとめれば、

（６）国家にどんな貢献ができるか。

ということに過ぎない。（６）を（１）の説得力にまで高めているメカニズムは、やはり形式的な部分に求められるが、それは、断定的な言い方とか、問いの形式といった、すぐに指摘されそうな要素とは別の部分に存在する。

（１）は「PではなくQ」の形式としてまとめることができる。そして、この形式の持つ説得効果を巧みに引出すことで、（１）の説得力は作りだされている。まず、この形式の一般的な説得効果を考えていきたい。この形式はPとQの対立を前提としているため、この形式の基本的な表現効果は、対比（antithesis）の表現効果と重なる。対比表現の性質については佐藤信夫氏による詳細な検討がある。佐藤氏の説明のポイントを見てみよう（佐藤（1992）pp.132-146）。佐藤氏は先行文献を渉猟した上で、対比表現の説得効

果について次のように説明している。「対比表現の」ポイントは「ふたつのものを対比的に提示するコンテキストの枠組み」にあり、そのコンテキストによって日常的な位置関係とは異なる「臨時の対義語」あるいは臨時的な「類義性」を作りだす。たとえば、

(7) 太郎は花子を「愛」していた、しかし彼女の方は彼に「恋」をしていたのである。

(8) 彼は「損得」によって決断したのではない。「愛憎」によって動いたのだ。

(7) では通常は類義語と考えられる「愛」と「恋」が対立する語と感ぜられる。逆に(8)では通常は対立関係にある「愛」と「憎」に類義性が感ぜられる。さらに、佐藤氏は、対比表現の背景として、われわれの基本的な意味認識の方法が二項対立を基本前提として成立していることを指摘する。対比表現はこれと同形の形式であるため「ことばの意味作用の本質的性格」を「強調」することになり、「みごとな効果を發揮」と説明している。佐藤氏の指摘する、表現形式(コンテキスト)が概念に対して優位に立つ性質は一般的なもので、撞着語法(oxymoron)などもこの性質の上に成立する語法である。「PではなくQ」も、PとQを対立あるいは対比の関係と感ぜさせる力を持つ。

対比に対する佐藤氏のこの説明に基本的に異論はない。ただし、本稿で問題としている「PではなくQ」の形式の説得効果を考えるためには、否定の性質とその表現効果を見落すことはできない。佐藤氏の例文(8)でも否定の表現効果は發揮されている。香西秀信氏は否定の次のような性質を指摘している(香西(1998) pp.146-147)。

「彼は振り返らずに歩いて行った。」という表現がある。が、この場合の、「振り返らずに」という状況は、彼が「振り返る」ことを期待ないし予想していた語り手が、それが裏切られたことによって提出させた疑似「事実」なのである。(中略)ある人が、「私は学生時代一度も旅行に行っていない」と言ったとする。(中略)彼が学生時代に「した」事は、理論的には有限の行為として客観的に記述しうる。しかし、彼が学生時代に「しなかった」事は、現在の彼が話題として何を思い浮かべるかによって、無限に発生する。

「PではなくQ」の説得効果を考える場合、上に指摘された否定の特徴のう

ち、否定が話者の「期待ないし予測」を背景として成立するという点が重要である。この性質によって、否定は話者の意図する「事実」を含意することができる。

(10) 昨日は一日中家にいた。

(10) で述べられた事実を否定を使って表現してみよう。否定は現実に拘束されないため、「『しなかった』事」を「無限に発生」させることが可能である。たとえば、

(11) 昨日はどこにも行かなかった。

(12) 昨日は学校に行かなかった。

(13) 昨日は東京に行かなかった。

等々、無限の表現が考えられる。そして、これら全ての例文には、ある「事実」が含意されている。すなわち、(11) では普段の日は外出すること、(12) では普段の日は学校に行っていること、(13) ではしばしば東京に行っていることなどである。「一日中家にいた」以外の「事実」であれば、どのような「事実」を否定しようとも嘘にはならないから、話者は自分の意図する任意の「事実」を含意させることができる。否定された「事実」は話者が否定すべきだと判断した「事実」である。当然すぎるこの前提が、否定にさまざまな含意を付加するのである。否定で含意される典型的な内容は、通常の状態、自然な状態、期待される状態などであるが、これが具体的文脈の中で具体化する際、特殊な意味を含意することがある。たとえば、ボックスとブイジックは、否定表現を使った証明、「否定証明」(negative verification) の説得効果を考察し、この形式が特殊な判断規範を含意できることを指摘している (Bax and Vuijk (1995))。彼らの挙げている例を引用してみる。

(14) 会話に活気がなかったから、パーティーは失敗だった。

(15) 私は夫に満足しているわ。夫は私を殴らないから。

(16) (工場労働者へのインタビューから)

「その単位 (規則で義務付けられた作業グループ) はあなたをサポートしてるはずでしょう? それでも、(グループが十分機能していない) 今のままで十分だと思いますか?」

「ああ、そう思うよ。もちろん、(ちゃんと機能すれば) もっとよくなるかもしれないさ。でも、今のままで大丈夫。まだ深刻な問題は

起きていないんだから。』

(14) に含意された規範は常識的であり、「失敗だった」という判断は自然に受入れられる。一方、(15) は「争いようもなく悪い結婚」という判断規範から夫を判断していることを示しているために、聞き手に「満足」という評価を再考させる。(16) も同様に最悪の基準からの判断であり、少なからず危うい「大丈夫」さであることがわかる。さらに、(15) (16) は、表向きの許容、本心での拒否という板ばさみ (double bind) までを感じさせ、そこでの含意は複雑である。否定証明は、板ばさみを感じている話者がしばしば使用する形式であると、ボックスとブイジックは述べている。

「PではなくQ」の形式においても、否定は特殊化された意味を含意する。ただし、この場合の含意は、Qに価値を付加する効果として顕在化するため、価値の付加と呼んだ方が実態に近いかもしれない。Pを否定して見せることは、その文脈において第一に「期待ないし予測」されるのがPであることを含意する。その結果、後につづくQに、当たり前ではないもの、あるいは価値の高いものという印象を与える。つまり、「PではなくQ」は対比関係を作るだけでなく、Qに価値を与える効果を持つのである。この形式はケネディー就任演説の中で多用されているので、そのいくつかを引用してみよう。

(17) われわれが今日祝うのは、政党の勝利ではなく、自由の祭典である。

(18) われわれは、彼ら (貧しい国々の人々) の自立を助けるために全力をつくすことを誓う—それは共産主義者がそうするからではなく、支持票を集めるためでもない—それが正しいからである。

(19) われわれの敵対者になろうとしている国々に対し、われわれは誓約ではなく要求を提出する。

(20) 双方とも、科学の恐怖ではなく科学の驚異を引出す努力をしようではないか。

他の類例も挙げてみる。

(21) 私はルノーのためではなく、日産のために来た。(日産自動車の最高執行責任者としてルノーから派遣されたカルロス・ゴーンのスピーチ)

(22) 人間は生きるために食べるのであって、食べるために生きるのではない。(古代ローマの格言)

(23) われわれがここで述べることに世界はほとんど注意を払わないだろう。また、長く記憶することもないのであろう。しかし、彼らがここで成し遂げたことを世界が決して忘れ去ることはない。(リンカーン「ゲティスバーグ追悼演説」)

(24) 人は女に生まれえない。女になるのだ。(ポーボワール)

これらの用例において、否定されたPの実質的な意味の程度、すなわちPの内容的必要性にはそれぞれ違いがある。たとえば、(22)において否定されているPは、実質の意味は希薄であり内容的必要性は低いが、説得力という点では必須の要素である。一方、たとえば(17)(24)では、否定された部分にも内容的必要性を指摘できる。ただし、いずれの用例でも、否定されたPと対比されることで、Qの価値は明らかに高められている。(否定の部分省略して比較していただきたい。)

上の用例の中で(24)は逆説と考えて異論あるまい。『第二の性』の冒頭である。ここで対比されている「女に生まれる」と「女になる」は、通常、連続的あるいは必然的なものとして理解されている。しかし、これらが対比関係として提示されることで、われわれは両者に新しい関係を発見し、「女になる」ことの新しい意味を読み取るのである。表現形式が概念に優先し、概念を変更させる例である。内容的にはこのような説明で足りるであろうが、説得効果の点では「女に生まれる」という通念が明示的に否定されていることを見落してはならない。通念を否定して見せることは、逆説であることを強く印象づける効果があるからである。通念を明示的に否定することの説得効果は高く、「PではなくQ」においてPが通念であれば、それだけで、Qを逆説あるいは逆説的と感じさせる効果がある。

本稿で対象としてきた(1)はこの効果を利用している。すなわち、通念を明示的に否定することで、見かけ上の逆説をつくりだしていることが、(1)の説得力の最大の要因である。ただし、(1)ではそれを確実なものとするためのいくつかの「仕掛け」がほどこされている。それらの「仕掛け」を検証してみよう。先ほど(1)の二つの問いを次のようにしてみた。

A 国家が諸君のために何をなしうるか

B 諸君が国家のために何をなしうるか

A、Bともに通念に沿った問いであったから、(1)を次のように整理してみる。

(25) 通念Aの否定 通念Bの肯定

AとBとは、国家による保護、国家に対する貢献という形で内容的に対をなしていた。これに、潜在的な逆説効果を持つ「PではなくQ」が巧みに組み合わせられる。まず、明らかな通念であるAを否定することで、それに続く内容も通念に逆らうであろうと予想させる。そして、次に提示されるBはAと内容的な対をなしている。その結果、本来通念であるはずのBが逆説に見えてしまう。次のような錯覚である。

(25B) 通念Aの否定 逆説Bの肯定

ここで、AとBが倒置反復であること思い出していただきたい。この倒置反復は、AとBとが逆転の関係であることを形式的に示すことで、AとBとの対を鮮明に感じさせる効果を持つ。ここでの倒置反復は印象的な表現を作るという漠然とした目的ではなく、Bを逆説と見せる明瞭な目的を持っているのである。それ自体を独立に観察すれば通念に過ぎないBであるが、このような幾重もの「お膳立て」の上で提示されれば、Bが当たり前の問いであると感ずる聴衆はまずいないであろう。しかし、いくら見かけ上は逆説であっても、Bは本来通念であるから(1)は絶対に受け入れられる。すなわち、国民と国家との関係における逆説的見解を聴衆全てに受け入れさせることができるのである。(1)は見事なほど周到に作られた殺し文句であり、これを就任演説全体の要の位置に配したことは、ケネディーの絶対的自信の現われである。そして、彼の思惑どおり、現在でも(1)は名文として世界に記憶されているのである。

参考文献

香西秀信(1998)『修辞的思考—論理でとらえきれないもの—』明治図書

佐藤信夫(1992)『レトリック認識』講談社

松尾式之(1987)『大統領の英語』講談社、1987年

柳沢浩哉(1991)「政治演説の修辞学的考察—ケネディー大統領就任演説におけるエトス—」(『表現研究』第53号、1991年3月)

Corbett, Edward P. J. and Connors, Robert J. (1999), *Classical Rhetoric for the Modern Student*, fourth edition (Oxford)

Bax, Marcel M. H. and Vuijk, Wim (1995), *Negative Verification, or the case of what is not the case*, in Frans H. van Eemeren at.ed. *Reconstruction and Application* (Amsterdam)